九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

一九一〇年代の韓国における翻案小説と新派劇の交渉 : 『毎日申報』にみる日本文学の受容と変容

申, 美仙

https://hdl.handle.net/2324/1440988

出版情報：九州大学, 2013, 博士（比較社会文化）, 課程博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（3）

KYUSHU UNIVERSITY

氏　　名　：申　美仙

論文題名　：一九一〇年代の韓国における翻案小説と新派劇の交渉
　　―『毎日申報』にみる日本文学の受容と変容―

区　　分　：　甲

論　文　内　容　の　要　旨

本論文は、1910年代の韓国における翻案小説を、文学テキストにとどまらず、文化的な側面にも着目し、当時の翻案小説のありようと韓国の大衆文化との関わりを考察することを目的とする。

本論の第一部では、『毎日申報』で連載された「双玉涙」、「断腸録」、「貞婦怨」を取り上げ、原作との比較分析を行う。

菊池幽芳『己が罪』の翻案である「双玉涙」は原作同様に儒教的倫理観から逸脱したヒロインが贖罪として赤十字病院の看護婦となることで「婦徳」女性として賛美されている。翻案における「婦徳」は、原作『己が罪』において環が取り戻す「婦徳」と相通じるものであるが、それは日本における良妻賢母主義が、植民地韓国でも同じイデオロギーとして実行される可能性を十分に含んでいることを示唆している。（第一章）

次に柳川春葉『生さぬ仲』とその翻案である「断腸録」を取り上げる。「断腸録」は連載される際、「家庭小説」的な側面が注目されていた。そこで示された「家庭小説」は烈女や婦徳を女性らに実践させる目的で書かれた朝鮮時代の「家庭小説」に最も近いものであったと考えられる。しかし、1910年代の韓国は家父長の権威が失われつつある時代であった。作中において家父長を象徴する男性人物がかつて俊謨の妾であった正子の巨万の富により、弱い男性としての姿を見せている。このような設定は、資本主義が優勢となった当時の韓国の現実を反映したものである。しかし、「断腸録」の結末における崔氏夫人の手紙は、正室と妾の秩序が断固としたものとして再確認されるだけでなく、男性の権威を回復することで封建的家父長制を肯定している。（第二章）

続けてブラットンの *RUN TO EARTH* と黒岩涙香『捨小舟』、李相協の「貞婦怨」を取り上げる。黒岩は原作のヒロインを貞操を貫く儒教的な女性へと書き換えており、それを底本とする「貞婦怨」もヒロインを婦徳を備えた女性として描き、韓国女性が模倣すべき女性として賛美している。ヨーロッパを舞台とする「貞婦怨」は連載当初から「西洋小説」の翻訳として紹介されていた。その背景には西洋諸国の文化を紹介し、韓国人の目を国際社会へと向けさせることを意図していたが、そこでは西洋＝文明、韓国＝未開という二分法的な立場がとられていた。しかし「貞婦怨」における西欧とは一度書き換えられた日本経由のものであることをあらためて確認している。（第三章）

第二部では韓国の新派劇団とその演目に焦点をあて、新派劇と翻案小説を演目とすることによって生成された演劇と文学、そして文化における影響関係を考察する。

翻案小説の戯曲化は『毎日申報』と劇団側の互いの利益が結びつくことで実現した。すなわち、小説を通して啓蒙を行いたい新聞社にとっては、新派劇のもつ視覚的効果が魅力であり、一方新派劇団にとっては、新聞という媒体がもつ広告の威力、連載小説による内容の波及効果が魅力となっていた。お互いの関係が『毎日申報』の演目、演芸欄などから明らかになり、1910年代における翻案が小説と演劇との交渉によって成り立っていたことが明らかになる。（第四章）

こうして翻案小説が戯曲化されていくなかで、新派劇は「涙」や「同情」に主眼を置いた。しかし、当時の韓国人は日本発の新派劇に違和感を覚え、劇中の「涙」を見て「笑い」、「騒然」とするといった態度をみせた。また、新派劇に演目を提供し、互恵的な関係をもっていた『毎日申報』が連載小説の性格を大きく変えることで、新派劇は「涙」を助長する演目を興行できなくなり、方策として古典小説を新たなレパートリーとするようになる。それは新派劇が古典小説との融合によって、韓国人の情調に合うような新たな「新派劇」の誕生を意味し、韓国的情調を盛り込んだ大衆劇が30年代に再び登場する土台となっている。（第五章）

第三部では趙重桓が翻案した「長恨夢」を主な研究対象とし、新派性とは如何なるものなのかを追求する。

今日の韓国において「長恨夢」は三角関係、とりわけ、沈順愛は愛と金の挟間で、金重培に表象される財力を選ぶ物語として最も有名である。しかし、実際に原作と翻案を比較分析してみると、順愛の性格や守一との関係、恋愛など翻案小説ならではの新しさが多く描かれているものの、作品そのものは家父長の権威を回復し、新女性として描かれている順愛が烈女となるなど儒教的な倫理観に基づく物語として翻案されている。（第六章）

「長恨夢」の主なテーマが三角関係や「愛と金」となるのは、演劇や映画、流行歌など様々なジャンルにおいて採用された後のことである。それは、「愛と金」の二者択一が切実な問題となり、韓国人に共感できる題材となった時代が到来したことを意味する。「長恨夢」の受容過程をたどっていくと主に大同江の守一と順愛の別れが取り上げられ、パロディー化され、笑いを誘うものへと変わる。こうした変質は「涙を助長させる」新派的な感情を植え付けたとされる、今までの「長恨夢」に対する評価とは異なる側面だといえる。（第七章）

以上の論を通じて、「通俗的」で「涙を助長する新派的な作品」と評価されてきた1910年代の翻案小説が、近代化や植民地を経験していた韓国においてどのような意味を持っていたのかという点を明らかにする。